
天然少年のお話

restart

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然少年のお話

【著者名】

Nコード

N35740

【作者名】

restart

【あらすじ】

短編。青春のひとコマです。

俺は、入院していた。入院と言つても別に凶悪犯に刺されて重症とかでもなく、とんでもなく馬鹿な理由でこの病院に搬送されてしまった。

「たゞくみ君。ちゃんと生きてるー？」

病室の扉が勢いよく開き、よく知つた顔が覗いた。俺の顔を見て笑顔になると、扉をしめて小走りでこちらまでやつてきた。

なんだか、むかつく。俺は体を起こした。

「……なあ、隼人。」

「ん？ なになに？」

「ちょっとさ、こう、手を顔にかざしてみて……。」

自分の右手を顔にかざし、手本を見せる。隼人は何も疑う素振りも見せずに右手を自分の顔にかざした。俺はいきおいよく、その右手を引っ叩いた。

「ぶつ？！」

いい音がした。ちょっとしたハツ当たりだが、疑いもせず信用した隼人に、少しだけ罪悪感が湧いた。……ような気がした。

「いきなり何すんだよ、お前は！」

右手を顔から離して、隼人が言う。少しだけ悪いと思ったので、正直に答えよう。

「いーちゃんの真似。」

「はあっ？」

意味がわからない、とでも言つように俺を見た。まあ、俺は正直に言つたので、これ以上説明する義理も必要もなかつた。

「それで、俺になんか用でもんのー？」

すっかり話題が逸れてしまったので俺から聞いてみる。それでや

つと話題が逸れていたことに気づいたらしく、隼人が「ああ」と声を上げた。

「匠にお客さんだよ。俺が連れてきてやつたんだから、感謝しろよ。じゃ、俺話し終わるまで廊下で待ってるからさ。」

そして、隼人が病室を出て行くのと入れ替わりに、これまたよく知った顔が病室に入ってきた。彼女は扉をしめるとなつくりとこちらに歩を進めた。

「あの、匠君。怪我の具合はどう?」

やつとのことで紡ぎだした言葉、そんな感じだった。

「ああ、大丈夫だつて。気にしないでいいよ。」

笑顔で言つ。彼女はそんな俺を見て少し安心したようだつたが、それでもまだ気まずそうに言つた。

「ごめんね。あたしのせいだ……。」

「いいつていいつて。あれは俺の不注意だし、柊さんの責任じゃないよ。」

ちなみに俺の怪我の理由は 学校の階段を下りながら、ちゃんと前を向かず柊さんと話していた。そこを階段を上つてきた下級生とぶつかつた。勿論、ちゃんと前を向いてもいなかつた俺は、階段を真つ逆さまに落ちた。床に強く打ちつけて足は折れましたと。思い出したらなんだかとても惨めな気分になつた。

……もつとカルシウムを摂つておけば。いや、そういう問題じゃないか。

「だつて、あたしが匠君に頼まなかつたら 「

そう言つて、俯いてしまつた。俺としては柊さんが責任を感じる必要はないと思つ。

まあ、確かに教室まで運ぶものがあるから、と言つて俺に頼んだのは彼女だけど、席も隣同士だし。日直の関係で教室にいたの俺だけだつたし。あの場面はしようがなかつただろう。

……結局、俺手伝つてないしさ。

「い、いやさ、本当大丈夫だつて。入院だつて大げさなもんだし、

俺すつごい元気だからさ。つてかわ、教室に運ぶものがあるって言つてたけど 大丈夫だつた？」

柊さんが顔を上げる。少し涙目になつていた。女の子を泣かす男は最低だ、と俺の親友が言つていたのを思い出した。

もしかして、俺つて最低？

「うん。先生に手伝つてもらつたから、大丈夫だつたよ。」

それならよかつた。柊さんが一人で運んだようなら、なんていうか、男として許せなかつた。

「でも、よかつた。匠君いつもどうり優しくて。あたし、匠君に嫌われちゃつたらどうしようかと思つた。」

そんなに俺は好かれてたのか。なんだか照れた感じだ。柊さんのことを見る。笑つてくれた。いつもあまり見せない笑顔がすごく綺麗だつた。俺は、テレビで見た可愛いアイドルを思い出した。ずっと見ていたい気分になつたが、すぐに笑顔は崩れ、顔を真つ赤にした。

「『ごめんねっ！じゃあまた来るから、じゃあねっ！』

「あ、あのぞ。」

柊さんが駆け出した。俺は最後に思つたことを正直に言つた。
「柊さんつて、笑うとすごく可愛いよね。学校とかで、もつと笑うといいよ。」

そう言つて俺が笑うと、柊さんは真つ赤な顔をさらに真つ赤にして、病室を出て行つた。……俺、何か変なこと言つただろうか？
まあ、いいだろう。本でも読もうか。顔を横に向かせる。

「お前、俺のこと完璧に忘れてただろ？」

隼人の顔があつた。いつの間に戻つてきたんだろ？。

「お前の影が薄いのが悪いんだよっ！」

「どんな言い訳だよっ！」

一秒でつっこみが返つてきた。つまらない漫才だつた。

「悪いが、話は全部聞かせてもらつた。」

なんだか不気味な笑みをこちらに向かせてくる。よくわからない。

話を全部聞いていた、ということは「イツは俺と柊さんの会話が終わるまで、ずっと病室の扉に耳をくつづけて聞き耳を立てていたのだろうか。

想像してみたら、ただの変人だつた。

「あ、そう。柊さんつていい子だもんな。」

「あー、やっぱそう思つよなー。つて、なんだよそれ。」

べしつ、という効果音がつきそうな感じで、俺の頭は叩かれた。

「貴様、我に何をするかつ！」

「申し訳ありません皇帝閣下つーつてだからなんでだよ。」

一回目だつた。別に俺は叩かれるようなことは言つていない。

喜んで叩いた? つてことは

「このサドステイツク野郎が！ 人を虐めて何が楽しい！ お前の頭は

どんな構造をしているんだ！」

「なんでそうなつたんだよ！ 俺はお前の頭の構造を知りてえよ！」

勘違いだつた。

「だからさ、俺は、お前が柊さんのこと、好きなんじゃないかって
言いたいんだよっ！」

意味不明だつた。特に、柊さんのことを好きか好きじゃないかで
見たことはない。いい子だとは思うけど、まあ、とにかく。

「別に？」

隼人がため息をついた。呆れられたようだつた。

「あー、まあいいや。じゃあ俺も帰る。また来るわ。」

「ああ、じゃあな。」

隼人が扉に手をかけたとき、軽く手を振つた。そのまま出て行く

と思つたら、一度だけ振り向いた。

「じゃあな、天然たらし君。」

言い返す間もなく、扉が閉められた。意味不明だつた。

数日後、見舞いに来た隼人に最後の言葉の意味をたずねた。
その意味を理解して、俺はこの病室が個室で本当によかつた、
神様に感謝した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3574o/>

天然少年のお話

2010年10月17日01時10分発行